

説教 『父よ、わたしの霊を御手にゆだねます』

小河信一 牧師

ルカによる福音書 23章44節～49節

44 既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。45 太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。47 百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。48 見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。49 イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。

本日の新約に対応する旧約聖書箇所、詩編31には、イエス・キリストの出来事を思い起こさせる句が出ています。

2014年3月の月報に掲載した説教で、〈詩編の読み方〉の主要な点を整理してみました。その際、詩編22により例示した〈読み方〉②「詩編を通して、イエス・キリストの出来事を思い起こす」に、詩編31:6が該当します。詩編22 (:2,8,9,16,19,32)と同様に、その詩句は私たちの目を、イエス・キリストの出来事の中でも、主の十字架に向けさせます。

詩編31は、苦難の中から神に救いを求めて叫んでいる祈りの言葉です。主イエスは、嘆き祈る一介いっかいの詩人の言葉を「わたしの声」(詩編31:23)として発してくださったのです。

詩編31:6――

まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます。

カルヴァンの注解では、詩人は「すべての不安を神に委ねゆだたてまつると、証しする」と見定めたくて、「なぜならば、誰にもせよ、神の御手と守りに寄り頼む者は、生についても、死についても、自らを神に結び付けるだけでなく、この世のあらゆる危険の真中にあっても、神の保護の下に平安な心をもって憩うからである」と述べられています。

一口で言えば、この詩人が求めているのは、「神の保護の下にある平安」です。その確かな平安は、人の多事多難の生死において、神と人の結び付きを絶つことなく、世のあらゆる危険から人を守り、人を憩わせるものです。

十字架上の今際の叫びとして、詩編31:6とほとんど同じ主イエスの言葉（ルカ23:46）が、私たちに残されています。いわゆる十字架上の七つの言葉、その最後が、この詩編31:6に拠っているのです。

もう一つ、詩編31を背景に確認するならば、「わたしの声をあなたは聞いてくださいました」（31:23）という確信と感謝をもって、主イエスが父なる神に向かって叫ばれたのであると、「思い起こす」ことが大切です。

父なる神に従う主イエスの姿勢は、ゲツセマネの祈りにおいても、また、十字架上の最後の祈りにおいても貫徹されています。それは、主イエスから私たちに對する招きであり、罪の誘惑や死の恐怖との苦しい戦いにおいて、神に向かって祈り続ける、そして、神にゆだねる信仰者の姿勢を告げ知らせています。

ルカ福音書23:44-45――

44 既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。45 太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。

夕暮れに先立って、全地は暗黒に覆われました。この時、主イエスは私たち人間のどす黒い罪すべてを担っておられました。神の怒りが、十字架の主イエスに降ろうとしています。

一瞬の出来事、「神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた」は、私たちに関わる重要な事です。それは、私たちの罪が、神の裁きによって完全に打ち砕かれたことをあらわしています。人の邪悪が世を支配する時代は、終幕を迎えました。そのような人間の罪に覆われた邪悪な時代の終わりは、私たち人間の力によってではなく、驚くべきことに主イエス・キリストの死によってもたらされました。

主イエスは、代々に罪深い人間が神による救いを願い続けてきた祈りをもって、その地上の生涯を終えられました。

ルカ福音書23:46――

イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。

主イエスは、夜ごとユダヤ人が眠りに就く時に唱えてきたような祈り（K.H.レングストルフ）を、今際の叫びとされました。言い換えればそれは、いわば小文字の〈prayer〉祈りではなく、およそ二千年前の過越祭の前夜、金曜日の午後3時になされたと特定される、大文字の〈Prayer〉祈りとなりました。

夜ごとに、あるいは、人生の夕闇が迫る病や死の床に、孤独な私の唱える〈prayer〉により、主イエスの〈Prayer〉祈りの平安に包まれます。私たちがかたわらに、「神に祈って夜を明かされる」主イエスがおられます（ルカ6:12）。

実際に死を迎えた時、主イエスに倣^{なら}って「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と叫んだ信仰者が数多くいると言われています。最初のキリスト教の殉教者、ステファノはその〈Prayer〉を唱えて、天の国へ凱旋しました。

使徒言行録7:59——

人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。

ところで、主イエスの今際の言葉は、「詩編31:6とほとんど同じ」と説明しましたが、その中でも少し異なっている点に目を留めたいと思います。

詩編31:6——

まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます。

ルカ福音書23:46——

父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。

明らかに違うのは、「父よ」という呼びかけです。

それは第一に、御子イエス・キリストが父なる神の御心に従って、十字架の御業を成し遂げられたことを表明しています。しかし、それが私たち人間を救い出すための御業であったことを顧みるならば、主イエスが私たちに代わって「父よ」と呼んでくださったと言えるでしょう。

本来、悔い改めをもって「父よ」と叫びを上げるのは、この私、すなわち、放蕩息子であるこの自分・罪人であることが、主イエスが語ってくださった「放蕩息子の譬え」に指し示されています。

ルカ福音書15:18——

ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん（父よ）、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。」

この譬えに出てくる「お父さん（父よ）」（ルカ15:12,18,21）は、十字架上の主の

叫び、「父よ」と同一の語です。

まさしく「父よ」は、私たちが上げるべき叫びでした。

勝手に父の家を飛び出して、罪の深みにはまってしまった私たちはもう、「父よ」と言う資格などありません。

しかし、かつて「放蕩息子の譬え」を話された主イエス・キリストは、ただお一人、すべての罪を担い、放蕩息子の立場に立たれました。主が罪人と同様に、十字架に上げられたというのは、そういうことです。

そして、主イエス・キリストは、十字架と復活の出来事によって、子が父の家へ帰る道を、もはや譬えではなく、真実としてあらわしてくださいました。主イエスは、私たち、放蕩息子が父なる神に立ち帰る道を切り開いてくださったのです。罪の償い方を知らず、あてどもなく、さ迷っていた私たちに、無償で帰るところが与えられたのです。

なんの功いさおも無い「子」である私たちは、真実の「御子」主イエス・キリストに救い出されて、その「御子」と共に生きる者となりました。そこで、私たち「子」は何を為すべきか……先んじて回答すれば「礼拝する」……ということが、金曜日の午後の出来事、「イエスの死」の記事の中に暗示されています。

ルカ福音書23:45——

太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。

先にこの一瞬の出来事は、神の裁きにより私たちの罪が打ち砕かれたことをあらわすと説明しました。それと同時にこれは、神と人との間の、隔ての幕が取り除かれ、新しい時代の幕が開いたことを告げています。この時、この三日間のうちに、〈十字架と復活の主〉の救いの出来事によって新しい時が到来したのです。

金曜日の午後は、ユダヤ人にとって、準備の時でした。

神の見守りの中で、婦人たちは夕べに「香料と香油を準備し」（ルカ23:56）ました。また、アリマタヤのヨセフとニコデモはその準備期限内に、つまり、安息日に入る前にイエスの「遺体を十字架から降ろして」「墓の中に納める」（ルカ23:53、ヨハネ19:38-42）ことができました。

ルカ福音書23:56——

婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ。

人々の手厚く、聖なる準備が目指していたのは、安息日、すなわち、「掟に従って」礼拝を行う時でした。

ところで、安息日に向けて、あわただしく準備の業を為した人々の心には、どんなことが去来していたのでしょうか？

それは、主イエスの葬りと安息日の礼拝が、あるいは、悲しみの儀式と喜びの儀式が、どのように相成り立つのか、ということだったのではないのでしょうか。

主イエスの葬りに心引かれつつも、敬虔なる者として、どのように礼拝の時を過ごすのか、また、罪赦された子として、喪中の今、どのように父なる神を拝むのか、それはまさに「あらゆる人知を超える」（フィリピ4:7）ことでした。

この時、この三日間のうちに、「きのうも今日も、また永遠に」（ヘブライ13:8）、神を拝む礼拝が開始されることになりました。この三日間のうちに、真の礼拝の時が満ちたのです（ヨハネ4:23）。

ルカ福音書23:47-48

⁴⁷ 百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。⁴⁸ 見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。

神に選び出された一人の異邦人が、十字架の主のもとで、自分の信仰を口で公に言い表し（ローマ10:10）、神を賛美し、主に栄光を帰しています。主の御前にあるこの百人隊長を囲むように、これらの出来事を見ていた群衆が集っています。

これこそ、私たちが打ち砕かれた魂をもって、〈十字架と復活の主〉イエス・キリストにひれ伏す礼拝です。死に直面して、私たちもまた復唱できる大きな〈Prayer〉祈りを教えてくださいました主イエス・キリストが父なる神の前に立って、とりなしてくださっています。父なる神と御子のもとより、聖霊がくじけそうになる私たちを助けるために遣わされています。

パウロが「この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです」（ローマ8:15）と語っている通り、神の霊に導かれる人には、どんな時にも「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と祈れる幸いが備えられています。